

卒業論文報告書

卒業論文タイトル「アイドルオタクになって生まれた人間関係ー同類とそうでない人に区別して築かれる関係性ー」

概要

筆者は、アイドル好きの母の影響で幼い頃からアイドルをよく目にする生活だった。学生となった今は、自らアイドルを見たり聴いたりするうえ、アイドルが好きだという共通点をきっかけに知り合ったり仲良くなった友達もできた。そのような背景もあり、3年次にはアイドルオタクがアイドルを追いかける理由や、アイドルをきっかけに知り合った友人同士の関係性についてアイドルオタクの方にインタビューをし、小論文を執筆した。その中でアイドルオタクの人間関係について深堀し切れなかったことや、一度書いてみることで新たに浮かんだ疑問点について調査するために今回このような内容をテーマに卒業論文を執筆した。

構成は、1章がイントロダクションと題し世間におけるアイドルオタクの位置づけについて、2章が今回の調査方法と調査協力者の紹介、3章より調査結果と分析となる。結果分析の章は3章あり、第3章でアイドルが好きの人同士の関係、第4章でアイドルに興味のない家族との共同生活について、第5章で「アイドルオタクだ」という自己情報とその情報を開示する友人の選別についてまとめている。なお、付論として「男性アイドルを好き」だという女性の自己認識と周囲の認識の差異についても論じている。

調査結果

ここでは、結果の章である3章、4章、5章、付論について要約する形で調査結果を報告する。

3章では、まずアイドルを好きになる経緯について大きく分けて3つあり、家族、友人、テレビなどの媒体であることがわかった。また家族ぐるみでアイドルを好きになっていくそのメカニズムは家庭内における子どもの社会心理の「同一視」や「モデリング」と通ぶるものがあつた。また、仲間とともにアイドルを応援することについては、仲間と応援することが、その人個人のアイドルの応援の仕方に影響するということが、また逆に一緒にアイドルを応援することでその仲間間での関係性が変化していくことがわかつた。ただそんな仲間ともうまくいくばかりではない。「担降り」による疎遠は、友人への思い自体が変化したからというより、単純に物理的な距離が生まれてしまうことに直接的な原因があるが、一番に応援するアイドルが変わることで会話の量が減つたりアイドルオタクとしての

方向性が変わり、それが原因でアイドルオタクの仲間としてのずれが生じることもある。また、コンサートチケットを数多く入手するために人脈の広さは重要となる一方、そのチケット関連で人間関係のもつれが生じることもある。

4章では、アイドルを好きな彼女たちがアイドルに興味のない家族たちと互いに譲歩と駆け引きをすることで共同生活をしていることが分かった。協力者の中には、理解はあれど全面的な応援とまでは至らない現状もあった。ただ、彼女たちが必要とする家族からの「理解」とは、一緒にアイドルを応援してくれること自体というより、アイドルを好きでいる自分を否定しないことであった。その理解は共同生活の中で生まれていくこともある。また4章2節では「互いに寛容になる」、「家族側が歩み寄る」、「アイドル好き当人が我慢する」という3つの場面に分けてアイドル好き本人とその家族の実際のやり取りをまとめた。ただそのような駆け引きはあっても、結局は彼女たちにもアイドルオタクとしての欲はあり、時にはそれを我慢できずに行動に移す場合もある。

5章では、まず家族の共同生活とは対照的な「アイドルオタクの彼女たち」と「アイドルに興味のない子」の間で一線を引いている友人関係について、この一線があることで彼女たちの「アイドル好き」は「個性」となり、確立されていることがわかった。ただその反面で、彼女たち自身の中にある線引きは、その相手にアイドルの話を大っぴらにするか否かの線引きにもなっている。その線引きの基準は、スティグマや「わかる」の3基盤に当てはめることで有効に整理できる。アイドルが好きか否かだけでなく、それ以上に複雑な基準でアイドルが好きだという自己情報は人に開示される。

付論では、既婚者女性の協力者の結果を中心としている。

彼女たちにとってアイドルと夫は、同じ生身の異性であっても別物であるのは当然のことである。しかしそれをパートナーやその親戚など周囲に十分に理解してもらえないこともある。そこに不満が募ることも人によってはある。ただ、アイドルを好きになって日も浅くまだ結婚も経験していない人にとっては、まだその「アイドル」と「周囲の男性の理想」が完全に整理しきれていない場合もある。それでもアイドルが好きになる以前よりアイドルオタクの中でアイドルと周囲の男性の立ち位置が違っていると理解できていることから、必ずしもアイドルオタクが周囲の男性と同じ感覚でアイドルを好きになっているとは言えない。

奨学金をいだけて

今回奨学金を頂けたことで何よりよかったのは、協力者の方々に謝礼金という形で手厚くお礼ができたことである。第一期調査はこの奨学金を頂く前に行っていたのだが、その際はたくさん感謝の気持ちを伝えはしたが、具体的な形にしてお渡しすることはできなかった。そのことに申し訳なさを感じていたが、第二期は十分な資金を頂いて臨めたことで第二期調査協力者の方々には調査にご協力いただいた後すぐにお礼ができ、第一期調査協力者の方々にも遅ればせではあるが同額のお礼をすることができた。インタビュー調査に

協力していただく場合、その人の貴重なお時間を1時間から何時間と頂き、待ち合わせの場所までご足労いただいたり、場合によってはインタビューの場所確保のため飲食代や交通費がかかったりする。もちろんそれを承知でご協力の了承は得ているが、調査者側にはどうしても申し訳なさは募る。1人や2人であればそれが自身の資金のみで賄えるかもしれないが、10人ともなると1人1人に十分なねぎらいができなくなってしまう。そのことに心配がなかったことで、調査自体に集中ができて本当に良かった。

また、遠方に暮らしている方で、どうしてもお話を伺いたかった方にも交通費等気にせずお話を伺いに行けたのは本当に良かった。予定では協力者の方が東京に来てくださることになっていたが、それが急きょ筆者が遠方へ出向いてお話を聞くことになり、奨学金がなければもしかしたらその方に話を聞くことをあきらめなければいけなかったかもしれないが、その心配もなく臨機応変にインタビューの場所を変更することができた。